

第二次審査（論文公開審査）結果の要旨

Risk factors for abscess development in patients with endometrioma who present with an acute abdomen

急性腹症を呈した卵巣内膜症嚢胞患者における感染のリスク因子

日本医科大学大学院医学研究科 女性生殖発達病態学分野
研究生 可世木 華子

Gynecology and Minimally Invasive Therapy Vol.12 (2023年) 掲載

DOI: 10.4103/gmit.gmit_36_22

申請者らは、急性腹症を起こした卵巣子宮内膜症嚢胞症例を、単純破裂症例と感染併発症例に分けて後方視的に比較検討することで、子宮内膜症嚢胞の感染リスク因子の抽出を試みた。

対象は日本医科大学付属病院で2011年4月から2021年8月までの期間に急性腹症を起こして緊急手術となった子宮内膜症嚢胞51例で、嚢胞内容液が白濁膿瘍化しているか、あるいは内容液から細菌が検出されたものを感染群 (n = 22)、内容液が褐色であり内容液から細菌が検出されなかったものを非感染群 (コントロール群、n = 29) と分類し、患者背景として年齢、Body mass index、婦人科受診歴、子宮内膜症の薬物療法歴、子宮内膜症の手術歴、3ヶ月以内の経膣操作の有無、6ヶ月以内の経膣操作の有無、腹痛時の月経周期について比較した。また入院時や術前時の体温、血清中 CRP、白血球数、画像検査の所見、術式 (腹腔鏡下手術または開腹手術)、手術時間、術中出血量、術後入院期間についても検討した。

感染群はコントロール群と比較して、有意に年齢が高く (p = 0.03)、子宮内膜症手術既往が多く (p = 0.04)、3ヶ月以内に何らかの経膣操作を受けている患者が多かった (p = 0.01)。6ヶ月以内の経膣操作は更に有意な差 (p = 0.0017) となった。感染群はコントロール群と比較して有意に入院時の体温が高かった (p = 0.007)。血液検査結果において、感染群では入院時の血清 CRP (p < 0.001)、および白血球数 (p = 0.016) が有意に高かった。術前の画像検査においては感染群で有意に嚢胞壁の肥厚や造影の増強効果も多く認められた (p < 0.001)。感染群では開腹手術において有意に手術時間が長く (p = 0.0085)、腹腔鏡手術においては術後入院日数が有意に長かった (p = 0.006)。

今回、卵巣子宮内膜症嚢胞感染併発例に関して文献的に報告されているリスク因子の他に、3ヶ月以内あるいは6ヶ月以内の経膣操作が急性腹症を呈した卵巣子宮内膜症嚢胞の感染リスク因子であることが初めて明らかになった。

第二次審査では、診断精度をさらに上げることを主目的として、子宮内操作に関わる問

診のあり方、腹腔内培養方法、偽陰性をへらすための追加検査項目、感染経路、腔分泌培養検査結果との相関等について質疑があり、いずれも的確に回答した。

本研究は、子宮内膜症合併症による急性腹症例に対して、手術が必要な感染併発例をより正確に判断できる可能性を示唆したものであり、本論文は学位論文として価値あるものと認定した。